PROJECT

個への視座、個からの視座

文・写真
齋藤　剛

共同研究 ● 個―世界論：中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム（2015-2018 年度）

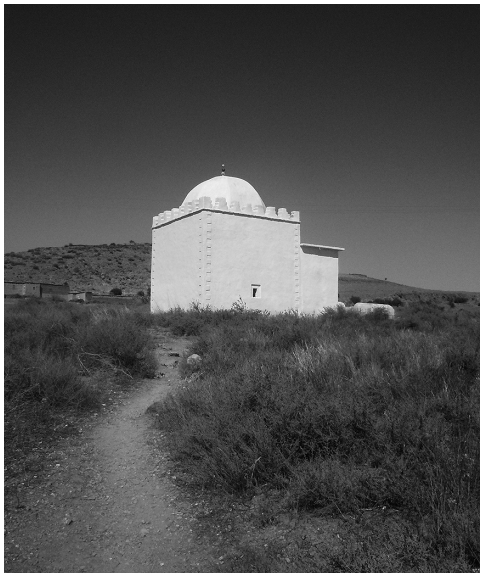
研究の目的と問題の所在

本共同研究は、中東を主たる生活の舞台として生きる諸個人が織りなす世界の特質を探求・解明することを目的としている。また、人、出来事、場、情報との遭遇がいかにして実現されているのか、超地域的な人・物・知の交流とミクロな生活の場の形成がどのように連関しているのかといった問いに対して、個々の人々の生活や生のあり方に焦点を定めて、答えてゆくことも企図している。これらの中でも今回は、個人に着目をするうえでの問題意識に焦点を絞って記してみたい。

そもそも個人に着目する視点は、ありきたりのものであると思われるかもしれない。しかしながら、個人から世界を捉えるという視点は、今日においてこそ求められるものである。国民国家内外における民族や宗教間の対立の激化、政治経済構造の劇的な変動が世界各地で認められる中で、社会、文化、民族などの諸概念が差異化・対立・分断など負の契機を内包していることが指摘されて久しいが、これらの近代的な認識パラダイムの限界は、それらが社会や歴史を現実に動かしている生身の個人の具体性から乖離している点にあるからである。また、中東研究では、流動的な社会・政治情勢を理解する際に、宗教・宗派、政党、民族、地域、国家などの差異がしばしば第一義的な要件とみなされ強調されてきているが、そうした視座は、個人が主体となって柔軟に切り結ばれる関係が社会のダイナミズムを生み出しているという側面を捉えきれていない。こうした問題点を克服するために、「等身大の個人」から彼らの生きる世界や生についての展望を開く必要があるのである。

ところで、個人から社会を捉えるという視点は、方法論的個人主義、ライフヒストリーなどにおいても援用されてきた。

廟に入るハーッジ（2011 年 9 月、タルーダント県）。



故郷の廟（2011 年 9 月、タルーダント県）。

だが、その場合には、社会を代表する「モデル」として個人を捉えたり、調査者と被調査者の間の距離が隔てられたままであったりするという問題点が認められる。同時に、ライフヒストリーにおいては、広大な広がりを持つ個人の生を捉えるうえでの方法論的問題に突き当たることで、肝心の個人の生を捉えるという試みから離れ、分析・観察する側の問題へと閉塞することとなってしまった。このような問題点を抱え込んでしまった、個人を対象とする研究においては、もちろん例外もあるものの、そこで扱われる個人と調査者との人間的な付き合いの深さや、その個人が調査者の人生を揺さぶり、その生のあり方を内側から変えていくような刻印を深く刻み込んでいく点については、学問外の個人的経験として後景に退けられてきてしまった。しかし、こうした経験を真正面から見つめ直しつつ、中東に生きる人々の生や生活、彼らの世界の広がりを学ぶことが我々の認識パラダイムを再考するための突破口となるのではないか、本共同研究はこのような問題意識に基づいて組織された。

以上のような問題意識は、本共同研究会に先行する国立民族学博物館共同研究「非境界的世界の研究──中東的人間関係のしくみ」（研究代表者：堀内正樹、期間：2010 ～ 2013 年度）における議論の中から芽生え、個人の生への関心をより先鋭化させる形で展開してきたものである。

フィールドの事例

ここで筆者がフィールドとするモロッコでの経験を紹介することにより（齋藤 2010）、個人からの視点で見えてくるもの、探求しようとするものの一端を明らかにしてみたい。

筆者が懇意にしている老商人ハーッジが病に倒れ生死の境を彷徨ったことがある。その後、彼は九死に一生を得て快方

に向かったが、脚の自由が利かなくなるという新たな問題に見舞われた。その時、不安にかられた彼が治療を頼んだのが、フキーである。フキーとは、元来はイスラーム法学者のことを意味する正則アラビア語のファキーフに由来する語であるが、モロッコにおいては、モスクを預かる人物、宗教諸学に通じた学者・教師、あるいは民間療法に通じた医者としての側面を持つなど、多面的な属性を有した人物を指す。ただし、その含意はこれだけに留まらない、フキーは神の恩寵によって人々の病を治癒することができると考えられる一方で、その治癒は神の恩寵によってではなく、悪魔の力に由来すると考える者もいるからである。つまり、イスラーム的には明確に否定的な意味を持つ呪術（スィフル）に通じた人物としてイメージされることがあるのである。

フキーを治療のために呼びたいと父親が言い出した時に、息子ムハンマドは当初逡巡しつつ、結局は、父の要求に同意した。さらに、それだけではなく、家族の言によれば、治療の過程を通じて次第に治療の効果を信じはじめたという。

筆者にとって興味深かったのは、そもそもムハンマドは、フキーによる治療や、フキーとしばしば深い関わりを持つ聖者とみなされる存在、そして聖者を埋葬した廟への参詣などに、それまで一貫して批判的であったのにも関わらず、この時は治療に同意したうえに、それにのめり込んだという点である。このようなムハンマドの逡巡や心の揺らぎが重要なのは、それが何よりも、聖者信仰や聖者信仰への批判などをめぐる既存の研究や、知識論的な視点からイスラーム社会の変化を論じようとする枠組みでは捉えきれない局面を示していると筆者には思われたからである。

友人の話を聞くハーッジ（右）（2011 年 9 月、タルーダント県）。

イスラームにおける宗教復興の現代的潮流を理解しようとする既存の研究が注目した論点の 1 つは、近代以降に導入された世俗的な学校教育の普及と、それに伴う識字率の上昇が、宗教的知識へのアクセスを独自に行なう新たな宗教知識人の出現を促し、独自のイスラーム理解や復興の潮流が生み出されているという点にあった（大塚 1989; 2004）。それは、イスラーム的知識の形成・流通・獲得に着目をした視点であったといえる。

こうした議論との関連でムハンマドのことを振り返ると、既存の議論の流れに沿う特徴が見事なまでに表れていることが明らかになる。たとえば大学院を修了した高学歴者であったこと、イスラーム的知識の探求に独自に熱心に取り組んでいること、その結果、モロッコにおいて伝統的に受容されてきたマーリク法学派ではなく、主にサウディアラビアで受容されている厳格なハンバル法学派の宗教的見解に共感するなどグローバルな宗教展開を体現していたこと、最後に、聖者信仰に批判的な姿勢を示していたことなどである。

このような典型的ともいえる特徴を示すムハンマドではあるが、治療では、知識論における理解からすると「逸脱」とも捉えられる選択をしたことになる。だが、その選択は単なる「逸脱」と捉えて済ますことができるものなのであろうか。それは、特殊な例外に過ぎないのであろうか。むしろこの事例は、人々の日常生活においては体系化された枠組みとはかならずしも相容れない選択や行為が満ちていることを示唆してはいないだろうか。そして、人々が様々な矛盾や戸惑いを抱え込みつつ生きている一面を、細やかに捉えてゆく必要があることを教えてくれているのではないだろうか。

一時的にせよ、フキーへの姿勢の変更をムハンマドに迫り、治療現場の構成を可能にしたのは、従来の「知識論」的な視点では等閑に付されてきた、父と子の多年に渡って積み重ねられてきた人間関係や、生死を彷徨った父への息子の愛情である。しかしながら、こうした側面は周辺的なものではけっして無い。そうした側面こそが日々の人間関係を構築したり、解消したり、あるいは知識を適用したり、適用を留保したりするのを大きく左右するからである。人々の生活の現場に目を向けるうえで、イスラーム的知識や読み書き能力の向上に焦点を定めた「知識論」的なイスラーム理解がもたらす限界をこの事例は示唆しているように思われる。

共同研究が目指すもの

硬直した枠組みや体系化の下では周辺化されてしまっている視点を呼び込むこと、人々の息づかいや言葉の端々にそこはかとなく浮かんでは消えてゆく感慨や逡巡、怖れや喜びに注意を傾けつつ、人々の生への理解を深めてゆくこと、これが個人に着目する視点が目指すものである。すなわち、個人を匿名的な存在とするのではなく、生身の個人としての人の姿を捉えることによって、その人が生きる社会や世界を描いてゆくことが問題となるのである。民族や文化、社会、あるいは宗教といったものをクローズアップし、大上段に構えた議論からは、そうした人々の生活に密着した実態が見えてこないのではないか。本研究は、人々の生活から乖離してしまった視点を退け、個人の生とそこから広がる世界に焦点を定めてゆこうとするのである。

【参考文献】

大塚和夫 1989『異文化としてのイスラーム』同文舘。
―― 2004『イスラーム主義とは何か』岩波書店。
齋藤　剛 2010「聖者信仰の『本質化』を越えて」『アジア・アフリカ言語文化研究』80 号。

さいとう つよし

神戸大学大学院国際文化学研究科准教授。専門は社会人類学。主な調査地はモロッコ。近年の研究成果に『イスラーム 知の遺産』（共著 東京大学出版会 2013 年）、『＜断＞と＜続＞の中東――非境界的世界を游ぐ』（共著 悠書館 2015 年）などがある。